

メリークリスマス、カ
ンパニエーロ

木下望太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西部の聖夜に轟く銃声！悪党へ鉛玉の贈物だ！

ガンアクション&バイオレンス西部劇、ここに開幕！
よりによってクリスマススイブに！

悪漢どもが民を苦しめる西部の街。

クリスマススイブのその夜、現れたのはサンタクロース。

——ただし。鋼の如き筋肉と、かっただ袋にいつぱいの銃を携えたサンタ。

「今夜が何の日か知ってたんだろ？俺はマジメさ、仕事に来たんだ。プレゼントを届けにな。これぞ賢者の贈り物、鉛玉をクソたつぷりとよ！」

銃弾飛び交う酒場の中、サンタクロースの剛腕が、二連散弾銃が悪党どもをなぎ倒す！

舞うは硝煙、そして血煙！

さらに現れる新たなサンタ、そして謎のガンマン……彼らの正体とは？

「俺のこの服、何で赤いか分かるだろ？ てめえらみてえな、小悪党どもの返り血よ——

——客席も温まった、これからが本番よ。聖母（サンタ）マリアもご清聴あれ、サンタ楽隊（マリアッチ）の大協奏だ！」

目次

最終話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
54	45	37	30	24	18	11	6	1

第1話

——十三歳のそのクリスマス、少年はサンタに願った。

サンタさん、お願いだから。おれに殺されてくれ、と。——

ぶちまけた砂のように空の一面で星の瞬く夜。軒下の暗闇で少年は白い息を吐き、冷え切った足の指をブーツの中でうごめかした。父が遺したブーツはまだ大きすぎたが、隙間に布を詰め込んでサイズを合わせている。いざというとき、しっかりと駆けられるように。寒さに足踏みした踵の下で、板張りのテラスが音を立てる。その失態に身をすくませ、体中全ての動きを止めた。そのままの姿勢で数秒いたが、家の中から物音はない。家族はよく眠っているようだった。

町並に目をやる。月明かりに白く浮かび上がる通りの人に姿はない、土埃を立てる馬も馬車も。通りの両脇には少年の家と同じく、二階のベランダを兼ねた軒とその下に板張りのテラスを備えた、木造の家が建ち並ぶ。そのどれにも明かりはない——ただ一軒、野太い笑い声と姦しい嬌声かしまの上がる酒場サルーンを除いて。

そちらに目を走らせ、少年はひどく顔を歪める。路地へと唾を吐き、右手を腰にやつ

た。革のホルスターに包まれた、腿の外側に下がるものに触れる。それは刺すように、全てを拒むように冷たく、だからこそ頼もしく思えた。

風が吹き、丸く絡まった旅枯れ草カンプルワイドが通りを転がる。砂が舞い上がり、地に落ちる音を雨のように立てた。そして砂煙の向こう、荒野から。少年は待ちかねた音を聞いた。

鈴の音。しゅんしゅんしゅんと揺れ響く、澄んだ音色。

古の聖人、全ての良い子の願いを聞く者。毎年来てはイヴの夜、全ての——ぐつすり眠った——子供の家を巡り、枕元にプレゼントを置く者。サンタクロース。

歯を軋きしらせ、少年は通りへと飛び出した。右手は腰に回している。銃帯ガンベルトに納まり、月明かりに拳銃リボルバーの握りへと。通りの真ん中で、音のする方へと真つすぐに向く。冷えた右手の指を何度も曲げ伸ばししながら。

やがて、砂煙の向こうで鈴の音が大きくなる。それと共に妙な音が聞こえ出した。ひどく聞きなれた、しかしそぐわない音。馬の、蹄ひづめの音。サンタクロースと言うのはトナカイに曳かせた橇そりに乗っているのではなかったか？

さらに鈴の音は大きくなり、砂煙は止み。月明かりの下、少年の前にそれは姿を現す。

馬。橇などはどこにもない。今しがた荒野で捕まえてきたかのような、砂埃にまみれた悍馬かんば。鞍には鈴がいくつもくくりつけられ、その上にまたがるのは。

筋肉。ふわふわとした白い縁取りのある温かげな赤い衣、それを破かんばかりに膨れ

た、巖の如き筋肉。それを備えた、老年の男。片目は黒い眼帯アイパッチに覆われている。衣と同じ素材でできた帽子の先は、岩を粗く削ったみたいな顔の横に柔らかく垂れ下がっていた。その突端には可愛らしくも白い毛玉のような房がついている、あまりにも悪い冗談のように。鞍の後ろには彼の体ほどもある、大きな白い袋を乗せていた。気のせいかな、この悍馬ですら足取りは苦しげに見えた。

「え……」

さすがに少年は言葉を失う。目にするのは初めてだがサンタクローズとはこんな、なんとというか、凶暴そうなものだったか？ 妹の、仇は。

サンタクローズは片手で手綱を持ち、片手に瓶を持つていた。それを口に当て、星空へ掲げるようにして中の液体を飲む。月明かりの下、琥珀色に揺れる瓶の中身はバーボンだろう。やがて白い息を大きく吐き、長い白髭の生える口元を拭う。ゲップの音が聞こえた。

少年が身動きできずにいるとサンタクローズは手綱を引き、馬の脚を止めた。目の前で、見下ろすように。

酒の臭いと共に低い声が響く。

「んだあ、ガキ。イイ子なら寝てろ、それか死ね」

少年は口を開けていた。何度か開け閉めし、ようやく言葉を絞り出す。

「あ、あんたが、サンタか」

サンタクロースは鼻を鳴らす。

「つたりめえよ。だからどうだつてんだ、ガキ」

少年は顔を引きつらせ、噛み合わない歯を鳴らし、やがて言った。

「死んでくれ」

表情を変えず、サンタクロースは懐に手をやる。細巻シガリロをくわえ、燐付ロウマッチを鞍に擦つて火を点ける。その明かりの中に眼帯アイバッチが浮かび上がって見えた。唇の端で細巻をくゆらしながら、また懐に手をやる。取り出した、赤い表紙の帳面を月明かりにかざしてページを繰くった。

「ふん……おめえ、ジョシユア・ウオーデンだな。リストにある……『サンタクロースを殺したい』だと？　クソみてえな願い事しやがってよ、ケツサから生バまれたクソホ太郎ルが。もちつとマシンリクエストはねえのかそのクソが詰まった頭にはよ」

ジョシユアの頬がひどく引きつる。

「うるせつ、死——」

ジョシユアの指が銃を握るよりも早く。鏡あぶみに乗せられていた、サンタクロースの足が動いた。砂まみれのブーツは正面からジョシユアの鼻を打ちのめす。通りへ倒れ、血のこぼれる鼻を押さえて起き上がろうとしたところへ。頭へ、硬いものが押し当てられ

た。

ゆっくりと顔を上げると。馬から下りたサンタククロースが手にしているものが見えた。銃。右手には水平二連の野太い銃身、短く切り詰めた散弾銃。左手には六連発の拳銃。それらがごりごりと、ジョシユアの頭に押しつけられていた。

表情の消えた顔のまま、ジョシユアはゆつつつくりと手を上げる。サンタククロースの顔をうかがいながら、空気を動かすのも怖れるように。

サンタククロースは鼻で息をつき、長い上衣の裾をまくった。そこに交差して下がる二本の銃帯へ、音を立てて銃を突っ込む。細巻を口の端で揺らし、煙を吹かす。

「で?」

ジョシユアは何も言えず、鼻血を滴らせながら目を瞬かせた。

身乗り出したサンタククロースが細巻を揺らし、ジョシユアの頭に灰を落とす。

「熱っっ!」

飛び上がったジョシユアに向けて、サンタククロースは煙を吹いた。

「で、つってんだろガキ。言えよ……なんでまたこの俺様を、良い子の味方のサンタククロースを、よりにもよって殺そうってんだ」

ジョシユアは何度か小さくうなずき、口を開いた。こわばった笑みを浮かべて。話すうちにやがて笑みは消え、顔を歪め、時折奥歯を軋ませて。

第2話

——ことの起こりは去年の秋、町を襲った強盗団。煉獄団バーガトリアスと名乗るそいつらは、奪うだけでは飽き足らず、町を根城と居座った。表向きは自警団、だが実態はダニの群れ。町の中から町の外から、金品作物かつさらい、時折り女も引つさう。小さな町だ、保安官はいない。電信も汽車も通つてはおらず、駅馬車も立ち寄ることはない。銃と力で脅されて、誰も何も言えなかつた。何もかもを取られても、誰も何も言えなかつた。

そんな町だったから、ジョシユアは銃を欲しがった。クリスマス願いはそれだった。町をどうにかできるとは思えなかつたが、せめて妹を、ジュリエットを守りたかつた。今は無事でもいつかは危ういと知っていた。

願つて眠つたイヴの夜が過ぎ、クリスマス朝。ジョシユアは銃声に目を覚ました。飛び起き、窓から外を見れば。怒号と銃声飛び交う中、町の男たちが猟銃を手に、強盗団へ襲いかかつていた。だが、ジョシユアが目を見開くその間に、弾けるような乾いた音がいくつも上がり。胸から頭から血を流し、男たちは倒れた。その中には父の姿もあつた。

ジョシユアは口を開けていた。喉の奥から、絞め殺されるガチヨウのような声がわずかに漏れた。そのままゆっくりとしやがみ込み、窓から、外の光景から目を背けようとして。その前に見つけてしまった。動かなくなった父へと駆け寄る妹の姿を。

寝間着のままジョシユアは駆けた。枕元で手に当たった、見知らぬ包みを半ば無意識に引つつかみながら。そうして、外へと裸足で飛び出したときには。下卑た笑みを浮かべる髭面の男が、妹に銃を突きつけていた。

ジョシユアは駆けた。間に合う距離ではないと知りながら駆けた。何もかもがゆつくりと感じられた、横たわる男たちの体を踏む生温かな柔らかい感触も、首を何度も横に振り、震えて後ずさる妹の動きも。銃を突きつける男が唇を吊り上げ、鼻筋から縫い傷の走る頬を歪ませて笑うのも。駆けながらジョシユアは感じた。自分の顔がゆつくりと歪む感触と。握り締めた、包みの中の硬い感触。思い出した、サンタクローズに願ったもの。

足を止め、包みを破り捨て、男へ向け。引き金を引いた。

男はわずかに目を見開いた、が。笑って銃を撃つ。妹の頭へ向けて。

その瞬間、感覚は元の速さに戻っていた。小さな妹の頭、その後ろから炒りトウモロコシのように弾けた、薄桃色の中身がジョシユアの顔へ散った。ジョシユアはそのままでいた。震えながら、痛いほどに引き金を引いたままでいた。サンタがよ

こした、木のおもちやの銃を。男は縫い傷の走る頬を歪め、肩を震わせて笑った。遠ざかるその背を見つめながら、ジョシユアは未だ震えていた。――

ジョシユアは今、銃帯ガンベルトの後ろに手をやる。そこに手挟んでいたおもちやの銃を取り、地面に叩きつけた。

「守れなかった。死んじまった、あいつは。こんなものつ、あんたがよこすから！」
サンタクロースは表情を変えず息を吸う。鼻から白く煙を吐いた。

「馬鹿が」

ジョシユアは顔を歪めてうつむいた。分かっている、分かっているそんなことは。今、本物の銃を手に入れたって――落馬でもしたのか、農作業へ行くときに見つけた流れる死体から拾った――奴らに向けることもできない。復讐が叶わないから、サンタクロースなんかには八つ当たりしている。本当に悪いのは――

サンタクロースはジョシユアの顔に唾を吐く。

「てめえだ、ガキ。悪いのは全部よ」

「え……」

煙草臭い唾を拭うのも忘れ、ジョシユアは顔を上げた。

紫煙を吐き出し、サンタクローヌは続ける。

「力のある奴が全部取る。力のねえ奴が全部悪い。力がねえなら泣き寝入れ」

ジョシユアはうつむき、それから顔を拭う。つぶやいた。

「そんな……そんなわけあるもんか、そんな道理が」

「それがこの国さ……少なくとも、昔俺が来た頃からな」

サンタクローヌはジョシユアに目もくれず、懐から出した別の帳面に目を走らせる。

黒い表紙の帳面。

「煉獄団、つったか？ ご大層な名前だぜ、クソ笑かしてくれらあ……と、なるほどな」

音を立てて帳面を閉じ、ジョシユアに目を向ける。

「偶然だな、ガキ。どうやらそいつらんとこは、俺の配達先らしい。居場所はそこの

酒場、サルーン 違いねえか？」

ジョシユアは目を瞬かせ、ただうなずいた。

サンタクローヌは馬に乗り、袋を肩にかつぐ。

「待って、配達って、何であいつらの……」

散弾銃が再び頭へ押しつけられる。

「ガキ。聖キリストしこの夜に、子供がすべきことは何だ？ 黙ってとつと寝るとき。覗き

見ることじゃあねえ、サンタの顔ツラとか、父ちゃんと母ちゃんがベッドでナニやってつか、

とかよ。でなきや死ね」

撃鉄が起こされる音が聞こえ、きりり、という震動が銃身から頭蓋骨に伝わる。喋ろうと開きかけていた口の動きをぴたりと止め、ジョシユアは再び手を上げた。

サンタクローズが白髭の伸びるあごをしゃくる。ジョシユアはその方向へ後ずさり、それから後ろも見ずに家へと駆けた。

音を立てて細巻を吐き捨て、サンタクローズはつぶやいた。

「さて、良い子のところへ仕事に行つか。メリー・メリー・ホーリー・シットクソみてえな聖しこの夜に」
馬が小さく駆け出して、鈴ジグベルの音が清く響いた。

第3話

聖きよしこの夜も相変わらず、酒場サリーン　山獅子亭クーガーズは酒の匂いと煙草の煙、喧騒を辺りにまき散らしていた。板壁にいくつも掛けられたカンテラと、シャンデリアに灯る蠟燭ろうそくの光の下、男たちは飲み、食い、所構わず唾と嘔み煙草を吐き捨てる。ある者は女を抱き寄せ、ある者は悪態を突きながら手にしたトランプをテーブルに叩きつけ、その向かいの者はにたにたと笑って賭け金を取る。そんな光景がカウンターでも、広間中のテーブルでも繰り広げられていた。男たちの腰には一様に拳銃が揺れ、テーブルや壁には無造作にライフルが立てかけられていた。

ボスの右腕を自認する、ジム・ウイドックはカウンター席でグラスの中身をなめた。皿に置かれた七面鳥ターキーの腿肉にかぶりついてあらかた食らうと、骨にこびりついた肉を丹念に舌でこそぎ取る。蜘蛛足のように細長い指についた脂をなめ、革のベストで拭きながら言った。

「まったく、クリスマスらしいものといや七面鳥こだけだな」

額に傷のあるバーテンダーが背を向けたまま、壁の鏡越しにウイドックを見た。

「あんたのおしやぶり癖はいつもどおりですがね」

昨年のクリスマスに店主を殺して以来、酒場は完全に煉獄団の根城になっている。店の者も団の一員だった。

ウイドックは鼻で息をつき、紙巻シガレットに火を点けた。煙を吐き出しながら二階へ目をやる。一階の広間を囲む形の廊下にくつつかのテーブルがある他、奥には増築させた別棟へ続くドアがある。酒場につきものの娼館パラーハウス——この場合は主に、略奪してきた女を売り飛ばすまでの味見場所——への入口だ。ボスも今はそちらにいるのだろう。自分も後で行くか、などと考えていたとき。酒場の出入口スウィングドアが、軋む音を立てて開かれた。

ブーツの音も重く、入ってきた客の姿に。喧騒は波が引くように静まっていく。やがて足を止め、その男は口を開く。白い縁取りに彩られた赤い上下を着た、白髭の老人は。丸太のような腕で大きな袋をかついだまま、巖いわおのような顔をほころばせて。

「ホーホーホーウー！ 良い子のみんな、お待ちかねじゃ！ サンタのおじさんがやって来たよう〜！」

男たちは動きを止めていた。誰も何も言わなかった。

やがてウイドックは息を吹き、紙巻を吐き飛ばす。それに合わせたように、回りの者も吹き出した。ウイドックは喉を鳴らし、肩を揺する。笑いはやがて大きくなり、酒場全体に広がった。

サンタクローズと名乗った男は満足げに髭をなで、にこやかに笑った。

「ホホ、ホツホホウ。いやはやさてきて、チビっ子のみんなは元氣じゃあのおう。どうじゃ、この一年良い子にしておったか？ 良い子にはさあさお楽しみ、プレゼントがあるぞう！」

驚きはしたが、ボスが余興に芸人でも雇ったのだろう。ウイドックは笑いながら席を立ち、サンタクローズの方へと歩いた。

「おいおい爺さん、家間違えてねえか。ここにやいい子なんて一人もないぜ」

何言ってるんだ、おれたちやみいんない子ちゃんだぜ！ おうさ、おりゃあお人形が欲しくてよ！ そんな野太い声が回りから上がり、酒場女が笑って手を叩く。

サンタクローズは嬉しげに眉を上げる。

「ホツホ、そうかそうかあ、みんな良い子じゃあ。さてさてその前に、一つだけお願いじゃあ。おじさん、みんなに会いとうて会いとうての。急いできたもんで、すっかりお腹がペコペコじゃあ。クリスマスのごちそうを、おじさんにも分けてくれんかのう？」

警戒するような顔を向ける者もあったが、ウイドックは笑った。近くのテーブルまで歩き、卓上の料理を示す。

サンタクローズは袋を置くと両手をこすり、舌なめずりしてナイフとフォークを取った。

「ホッホウ、ありがたやありがたや。さてさて、今日のメインデッシュは何かのう？
牛肉？　いや——」

ステーキ皿の上をナイフが通り過ぎる。フォークが別の皿に向けられ、しかしそれも通り過ぎた。

「——七面鳥？　違うな——」

サンタクロースは変わらず笑っていたが。ウイドックはその片目が眼帯に覆われていることに気づいた。

サンタクロースの笑みが消えた、いや。一層の笑みをたたえていた。獲物を前にした、肉食獣のような。

「——てめえらだ、腰抜けども」

振りかぶられたナイフとフォークが。ウイドックの脳天に突き立てられた。

叫びながらウイドックは初めて聞いた、自分の頭蓋に、皮ではなく骨に何かが刺さる音。それは鼓膜を通してではなく、骨を伝って直接耳の奥に聞こえた、こりり、ペギつ、と。その後何か、頭蓋の奥で柔らかい感触。

そして。サンタクロースが抜き放った散弾銃が、自分の口に突っ込まれる。それがジム・ウイドックの見た、最期の光景だった。

ナイフとフォークを突き立てた頭が、赤く粉々に吹っ飛ぶのを見た後。サンタクロースは即座に、分厚いオーク材のテーブルをつかんだ。

男たちが腰の銃を抜き、サンタクロースへ向けててんでに撃つが。弾丸は全て、傘のようにかつぎ上げたテーブルに阻まれた。

血の香りを消すほどに、辺りには火薬の匂いが満ちていた。互いの姿もおぼろげにか見えない白煙の中、サンタクロースは背を向けたまま口を開く。

「おいおいクソども、急に曇ってきやがったな。どうやらにわか雨らしい。ずいぶん柔やわな雨粒だよ」

銃を向けたまま、男たちが声を上げる。

「てめえ何者だ、どこの差し金だ！」

「何しに来やがった！」

サンタクロースは鼻で笑う。

「可哀かええそうによ、頭が悪いのは見りや分かるが、目まで悪いときた。今夜が何の日か知ってんだろ？ なら、見りやあ分かんだろが」

「ふざけてんじや——」

怒鳴る声をさえぎって続ける。

「俺はマジメさ、仕事に来たんだ。プレゼントを届けにな。これぞ賢者の贈り物、鉛玉を

クソたつぷりとよ！」

テーブルの陰から身を乗り出し、サンタは両手で銃を放つ。二連散弾銃の残り一発と、拳銃を連続で。

何人かの者が倒されながら、男たちも銃を撃つ。ある者は立ったまま、ある者は床に伏せて、またある者は倒したテーブルの陰から。床に壁に弾丸が食い込み、流れ弾がカウンターに飛んで鏡を割る。

やがて射撃音が止む。広間中に白く煙がこもり、互いに的が見えなくなったからだ。どころか、隣の者の顔すらおぼろげになる。

漂う煙の中、物音はせず。サンタクローズの隠れたテーブルの方にも動きはない。最前列にいた男は倒したテーブルの陰に伏せ、隣の者に言った。

「奴あ撃ち尽くしたはずだ……再装填リロードの音もしねえ。今なら踏み込める」

「ああ、そのとおりだ。冴えてんなお前」

立ち込める煙の中でそう応じた、隣の者は。よくよく見れば、上下に真っ赤な服を着ていた。

「えっ……」

ようやく理解した男が銃を向けるより早く。サンタクローズは相手の首根っこをつかむ。即座に引き寄せ、盾にした。他の者たちが放った弾丸からの。

銃声が続く中、サンタクローズは再びテーブルに隠れる。盾にした男は体中を血に染め、それでも生きてうめいていた。片手で男をつかんだまま、サンタクローズは細巻をくわえる。その先を男の方へ突き出した。

「ん」

男は魚のように口を開け閉めし、目だけで相手を見た。

とたん、サンタの顔が歪む。

「使えねえ……点けろっつってんだ火をよ！」

音を立て、頭を床へ叩きつける。それきり男は動かなくなつた。

第4話

ボスの右腕を自負する男、ション・ブリツジスは二階席にいた。左手には愛用のウィンチエスターライフルを抱えている。手すりの後ろで屈み、右側面の装填口から一発ずつ弾丸を込める。最大まで装填し、騎兵刀サーベルの護拳鏢ナックルガードのように引き金を覆ったレバーを引き下ろす。内部機構が噛み合う小気味良い作動音がしたところで戻した。これで弾倉から薬室へ、弾丸が一個送られた状態。いつでも撃てる。その上でさらに、一発分空いた弾倉へ弾丸を込め直した。

値の張ったスーツにしわが寄るのも構わず、手すりから身を乗り出す。構えながら叫んだ。

「デメエら無駄弾バラまくんじゃねえ、見えねえだろが！」

銃床を右肩につけ、煙の向こう、敵の隠れた方へと銃口を向ける。やがて煙が薄れ、赤い人影がおぼろげにのぞいた。

本来なら頭を撃ち抜いて決めたいところだったが。煙の中では不確かだったし、外せば何をしてくるか分からない。煙が引く前に胴体を狙ってケリをつける。そう考え、人

影の中心を狙って引き金を引いた。

乾いた発砲音と同時に、赤い人影は大きく揺らぐ、だが。相手は倒れる様子もなく、そこに立っていた。

当たり所が悪かったのか。そう考えてさらにレバーを下ろし、引き金を引く。同じ動作でもう一発撃つ。それでも相手は倒れなかった。

煙が引く。サンタクロースはそこにいた。盾にするものもなくただ立っていた。くわえた細巻の先から白く煙を昇らせて。

「ふん……！」

サンタクロースは腰の前に両手を下ろし、拳を握る。みちり、と服の生地が裂けかける音を立てて、腕の、胴の、脚の筋肉が膨れる。そして、小さな音を立てて。胸と腹から、三発の鉛玉がこぼれ落ちた。

シヨーンはライフルを構えたまま口を開けていた。

「な……あ……？」

弾丸の跡だろう、サンタクロースの服には三箇所小さく穴が開いている。その中には鈍く光るものが見えた。縦横に編まれたワイヤーと細い鎖。防弾のための細工らしかったが、それにしても。弾丸の貫通はともかく、衝撃までは防げるわけがないのに。

サンタクロースは苦しむ様子もなく、おもむろに散弾銃の上部、小さなレバーを横へ

ずらす。銃身が根元から三十度ほど折れ、中の空薬莖が飛び出した。銃帯から取り出した弾丸二発を、そこへ新たに込め直す。金属の噛みあう音を立て、銃身を戻しながら口を開く。

「なあおい。俺のこの服、なんで赤いか分かるだろ？ てめえらみてえな、小悪党の返り血よ。そう……俺の血なんかじゃねえんだよ」

顔を引きつらせながらも、シヨーンは再びライフルを構えた。今度は額へと狙いをつける。しかしシヨーンは見えていなかった、サンタクローズが足元の袋、かついできた大袋に片手を伸ばしたのを。

引き金を引く。が、外しようなない距離で撃ったはずの弾丸は、甲高い音と共に弾かれていた。サンタクローズが袋から取り出し掲げた、わずかな反りを持つ片刃刀の横腹に。昔の戦で使われた海軍刀カトラースにも似ていたが、これはまるで斧のように分厚かった。

サンタクローズは煙を吹き出す。

「全く、楽でしようがねえよ。どこ狙ってくるか分かるんならな」

サンタクローズがこちらへ銃を向けるのが見えた。一瞬後、轟音と共に腹へ胸へあごへ前歯へ舌へ、砂利粒ほどの散弾がめり込む。よろめき、手すりにすがろうとして、一階へと落ちた。頭から。

シヨーン・ブリッジスは生まれて初めて、自分の背中をその目で見た。スーツの背に

染みがあるのに気づき、舌打ちしようとして、曲がり切った首のまま、その暇もなくと切れた。

「ハッハー！」

ご機嫌な声を上げて、サンタクロースはテーブルを跳び越える。

男たちは椅子を蹴倒し銃を取り落とし、先を争って奥へ引く。逃げ遅れた間抜けの頭がクルミのように堅い音を立てて、海軍刀カトラスに叩き割られた。

銃を向ける男もいたが、散弾銃の一撃に二人がまとめて打ち倒される。その横にいた一人が銃を突き出す、筒先が震えるばかりでいっこうに狙いの定まる様子はなかった。

散弾銃を捨てて踏み込み、サンタはその手から銃をもぎ取る。

「なっっちゃいねえな、教えてやるぜ。こう使うのよ！」

銃身を握り締めたまま、片足を浮かして振りかぶる。銃把の底を、頭へ目がけ叩きつけた。

歯を折り飛ばされながら男は倒れる。その首を踏み砕き、サンタはさらに奥へと跳んだ。悲鳴を上げて後ずさる、別の男の襟首をつかむ。首を締め上げながら片手で軽々と持ち上げた。顔を寄せて言う。

「なあ旦那セニョール。変だな、せつかくのイヴだつてえのに、皆なんて邪険にするんだい。おかし
 いったらねえぜ、なあ？」

男は足をばたつかせながら小刻みにうなずく。手にした銃の先を密かに向けようとした、が。

サンタクロースは勢いをつけ、男の体を大きく浮かせた。そのまま肩へかつき上げる。そしていったん手を離し、今度は片方の足首を握った。

「パーティだ……せつかくだからよ。踊ろうぜ！」

一度腰を落とし、跳ね上げる勢いをつけて。男の体を片手で、横殴りに振り回した。風を切る音を立て、男の体はテーブルを酒瓶を料理の皿を椅子を仲間をまとめて吹っ飛ばす。一度振り切ると、今度は逆へと振り回す。それが終われば次は縦に、斜めに、また横に。

悲鳴を上げながら逃げ惑う、男たちへサンタが言った。

「ヘイ、どうした野郎どもムチャチヨス。シャイになんなよ踊ろうぜ！ 来いよバモ、野郎ども、来い！
 引つ込んでんじやねえぞもしもし、カモン！ ハロー！ハロー！ハロー！ハロー！ハロー！ハロー！
 ハロー・ハロー・ハロー・ハロー・ハロー・ハロー・ハロー！」

床に、柱に、男たちに、壁に。雑巾でも振るうように軽々と、次に次にと叩きつける。空いた片方の手で銃を二階へ撃ちながら。何個目かの机を叩き割ったとき、すでに男の

頭からは柔らかいものが飛び散っていた。

第5話

互いを押しつけ押し倒して逃げ惑う喧騒の中。自分をボスの右腕と公言してはばからないダン・ブレナンは、冷静に一計を案じていた。右腕の座を争うトーマス・ペックに声をかけ、必要な人員を確保すべく駆ける。サンタを避けて壁沿いに。

そして相手から届かない出入口のそばで、壁を背に。二人は銃を向けた、それぞれに連れ出した酒場女の頭へ。

「正義の味方さんよ。そこまでだ、銃と……あー、死体を捨てろ」

酒場女らはそれぞれに銃を向けた男の顔を見る。二人の男は黙って小さくうなずいた。この女らは団の情婦、仲間の一員だ。撃つ気はない。

サンタクローズは振り向き、動きを止めた。武器と死体を下ろし、しかし捨てる様子はない。

「ダン、強く銃を押しつける。女は涙を流して叫んだ。」

「いやっ、助けて、助けて！」

サンタクローズはうつむき、すっかり短くなった細巻を揺らす。

「なるほどな……こいつあ弱った」

死体を離れた。その手で細巻をつまみ、煙を吐く。もう片方の手は人差指を、銃の引き金を囲む用心金トリガーガードへ突っ込む。そのまま弄ぶようになってくると回した。

ダンと言う。

「聞いてんのか、とつとと捨てろ！」

サンタはなおも細巻を吹かす。

「カツカすんなよ……慌てる乞食はもらいが少ねえ。つつか何だ、困ったことになったが。世の中、困ったときの何とやら、だよなあ」

サンタクローズが細巻を捨てた、そのとき。ダンは妙な音を聞いた。板を折るような乾いた音と、逆に湿った音。何か突き刺さるような。

「……あ？」

見れば。横にいたトーマスの腹から、細長い刃物が突き出ていた。酒場の外から壁を破って突き刺されたらしかった。騎兵刀サーベルに似た曲刀だったが、それは血に濡れながら妖しく輝き、のたうつ蛇のような、あるいは流れ落ちる水のような刃紋を見せていた。

そう思う間に。今度は爆ぜる音と共に、ダンの背中に熱いものが食い込む。銃弾。これも外から、壁を貫通して撃たれたようだった。

女たちが悲鳴を上げ、背を押さえながらダンは倒れ込む。刀を抜かれたトーマスはも

たれかかるように、壁に血を塗りつけながら崩れ落ちた。

焼けつく痛みの中で見た。スウィングドアを押し開けて現れた男たちを。揃いの赤い衣を着た、二人のサンタクロースを。

一人は大きな布袋をかつぎ、血の滴る刀を提げていた。三十よりは若い、痩せぎすの男。東洋人か、赤い帽子の下からは黒髪と浅黒い肌がのぞいている。頬のこけた顔にえらだけが高く張っており、目は刃物のように鋭かった。

もう一人は布袋を足元に置き、両手に拳銃を持っていた。眠たげに目尻の垂れた、二十歳になるかどうかの白人。まるで飾り立てるように、何重にも銃帯を着けていた。上衣の肩から胸を交差させて腰へ二つ。肩から両脇に回して二つ。ズボンの上、腰に交差させて二つ。それぞれの上にずらりと予備の弾丸が収められ、空になっている腰のもの以外はホルスターへ拳銃が吊るされていた。

銃を持つサンタが老いた眼帯のサンタに言う。

「遅エスよ、クリスの旦那。オレらあとづくに配達終わったぜ？」

もう一人のサンタがトーマス・ペックに刀を突き刺し、銃のサンタがダンの方を見ようともせず、そちらへ向けた引き金を引く。女の悲鳴を聞いた気がして、ダン・ブレナンはそこで死んだ。

クリスと呼ばれたサンタクロースは口笛を吹く。

「悪いな。^{グラシヤス}助かるぜ、仕事の早え同僚がいると」

刀のサンタはにこりともせず、袋を足元に捨てる。武器の血を払うとズボンで拭いた。腰の鞆には納めず、手に提げたままにする。

銃のサンタは同じく、外から拾い上げた袋を足元に置く。笑って言った。

「なあに、いいってことスよ。貸しっただけ覚えてもらえりやあ」

「言ってくれるぜ、小僧^{キッド}」

笑いながら、クリスは放り出していた自分の袋を取る。中から新たな散弾銃^{ショットガン}と海軍刀^{カトラス}を引っ張り出した。そしておもむろに、撃つ。人質だった女の頭を。

下あごから上を無くして崩れ落ちる、一人の女の手には。三人へ向けられた小型の拳銃があった。

クリスは銃口の煙を吹く。ウインクのもりか死体に向けて、眼帯に覆われていない目をつむってみせた。

「化粧が台無しだな、美人^{ボニータ}さんよ」

口を大きく開けたまま、もう一人の女がへたり込む。こちらは武器を手にしておらず、傷もない。

銃を持ったまま、キッドと呼ばれたサンタがひざまずく。手を取って女を立たせた。

「失礼、レディ。貴女のご友人にちよつとした粗相が、ね。もちろん貴女に限つてはそんなことありませんでしょうけど、ま、ちよいと外で待つてもらえますかね」

にやけて腰に手を回すキッドから奪うように、刀のサンタが女の肩を取つた。無表情のまま外へ押していく。入念に、女の尻を片手でもみながら。

クリスが楽しげに鼻を鳴らす。

「相変わらずだな、スラツシヤー。さあて兄弟^{ファミリー}」

細巻をくわえた。広間と二階で固まつたまま身構える、煉獄団の男たちを見渡す。

「客席も温まつた、これからが本番よ。聖母^{サンタ}マリアもご清聴あれ、サンタ^{マリアツチ}楽隊の大協奏だ

！」

クリスの散弾銃が合図だった。キッドの二丁拳銃が火を吹き、男たちがてんでに銃を撃ち、隙間を縫つてスラツシヤーが駆ける。銃口を向けられるより早く距離を詰め、振り上げた刀が手首を斬り飛ばし、返す刃が首を刎ねる。身をひねつては別の相手の腹を裂き、流れるように胸を突く。横から敵が銃を向けるが、筒先から素早く身を引く。その敵の手をキッドが撃ち抜き、クリスの投げた酒瓶が顔を砕いた。

クリスとキッドは弾丸を惜しみはしなかつた。全弾撃つては再装填もせず銃を捨て、銃帯から新たな武器を出す。それもなくなれば、かついできた袋から次々に銃を取り出す。今や二人の足元には立ち込める煙の中、空の銃が山と積まれていた。それは奇妙な

ことに、もはや袋自体の大きさを越えているようにさえ見えた。

煙が完全に視界をふさぐ中、敵も味方も無駄弾をばらまく。その中を絶えず赤い影が駆け、血に濡れた刃を振るい続けた。

クリスは鼻の穴を広げ、機嫌良さげに硝煙の匂いを嗅ぐ。口笛を吹き、叫んだ。

「スラッシャー、いつペン下がれ！ キッド！ あれの出番だ、奏でてやりな！」

「了解！」

キッドが袋から引きずり出したものは。どのような手品か、明らかに袋に入りようのない体積をしていた。頑丈な三脚に据えられた、円く束になった銃身を備えた回転式機関銃。

クリスは叫ぶ。

「カモン！ ギターソロ、カモン！」

白い歯を見せ、キッドが側面のクランクを回す。銃身の束はそれに合わせて回転しながら、轟音と共に弾丸を連続で吐き出した。

雲のように濃い煙の中、男たちの悲鳴と、肉に食い込む湿った音が絶え間なく奏でられる。近くの壁に床に柱に、見る間に黒く弾痕が穿たれる。その中で一際高くクリストキッドの笑い声が響き、スラッシャーはにたにたと笑っていた。

第6話

煉獄団のボス、ヴィック・ドンレヴィは常識のある男だった。だから酒場はドアの隙間からのぞいただけで、変態どもの相手をしようとは思わなかった。

銃帯を手早く身につけ、愛用の帽子を目深にかぶる。娼館に残っていた部下を連れ、手近な武器と財産をかき集めた。それと女たちも。

もはや一杯の馬車に女の尻を押し込めながら、部下である御者が言った。

「ボス、女は置いてきやしよう！　こんなんじや追いつかれちゃう！」

それはそれで儲けものだ、とドンレヴィは常識的に考えていた。自分と腹心はそれぞれ馬に乗っていく。追手が馬車に構ううち、自分たちだけは逃げられる算段だ。

「俺のもんだ、連れていくに決まってる！　何やってやがる、とつとつブチ込め！」

自ら馬車の横に回り、女の背を押そうとして。中から逆に、首根っこをつかまれた。暗い馬車の中から突き出す女の片手には、拳銃があった。

「ミスター。パーティは途中、お帰りにはまだ早いが」

低く張りのある声でそう言ったのは白人の女。豊かに伸びる金髪を太長い三つ編み

にして、ドレスの肩に垂らしていた。

こんな女は娼館にいなかった。そう気づいて部下へ声を上げるより早く、むしり取るように髪を横からつかまれた。

耳元へ口を寄せ、息をかけながら女はささやく。

「ミスター、ミスター。みっともないぞ、女を前に取り乱して。せつかくの誘いだ、据え膳食わぬは男の恥だろう？ それとも——」

女が持ち上げた銃の先が、ドンレヴィの帽子を落とす。銃口はそのまま下がり、冷たく顔をなぞった。額を、眉間を。鼻筋から頬に走る、ねじくれた傷跡の上を。そして髭の生える頬を通り、口の中へと。

「——駄々っ子め、贈り物がなければ嫌か？ 代わりに髪型でも変えてやるか、あごから上ごとさっぱりとな」

気づいた部下たちが銃を向けるが、むしろ主人のような様子で、女は口を開いた。

「控えよ！ ……ミスター、しつげがなっていないな？ 奴ら、いやしくも主人に銃を向けているぞ？ それより何より、この私にだ」

嘲るように眉根を寄せて、盾のようにドンレヴィを引き寄せる。銃を口から抜いて女は続けた。

「女どもは解き放て、お前と部下は来てもらう。私の代行者^{エージェント}らが踊りたい様子だ」

「何なんだ……てめえは」

笑いもせずに女は言った。

「サンタクローズ。五十九代目、^{セント}聖ニコラウス。それが私の名だ」

生地の薄いドレスを片手で自ら引き裂く。その下には酒場で暴れる男たちと同じ、赤い衣があつた。

取り出した赤い帽子をちょこん、と頭に載せ、真顔のままニコラウスは言う。

「良い子ではなさそうだ、会ったこともなからうが。先代殿と私は違う。去年のように見過ごしはせんぞ」

白煙の薄れかけた広間の中で、弾丸のなくなった回転式機関銃ガトリングガンが軽い音を立てて回っていた。

「ハッハ、ヒイツハー！」

火薬の香りに酔うクリスが快哉を上げ、キッドも薄笑いを浮かべながら機関銃のクラックを未だ回していた。スラッシュャーは血に染まった愛刀を見つめ、にたりにたりと笑っている。

酒場の壁は一、二階とも、虫の大群が食い散らしたように穴が開いている。血を流して床一面に倒れた男たちの中に、動く者は一人もなかった。

そのとき不意に、外れかけたスウィングドアが軋んで揺れる。

三人は即座に武器を取り直し、そちらへと向けたが。入ってきた女は怯みもせず、弾はじくような声を上げた。

「アテンション
「気をつけ！」

条件反射といえる速さで。三人の男は靴音も高く足を合わせ、姿勢を正した。

手を上げたドンレヴィと部下に銃を突きつけ、入ってきていたのは。聖ニコラウスと名乗った女だった。背筋を伸ばし、不機嫌にすら見える眼差しを投げかけて口を開く。

「まったく、イヴの夜に私ほどの不幸者はおるまい。部下の仕事がこれほど遅いとな」
変わらぬ姿勢のまま間髪入れず、三人が声を揃えた。

「マム、イエス・マム
「押忍、長官殿！」

「たるんでおる。貴様らを拾い上げたのは見込み違いだったか」

「どこか引きつった顔で三人が言う。

「マム、ノ、ノ、ノ
「押忍、いいえ長官殿！」

「ならば続けて唱和せよ、五十九代ニコラウス鉄誓てっせい！ 我ら血を以て」

「一分の乱れもなく、声を揃えて三人が言う。

「血を洗いッ！」

ニコラウスは続け、三人が後を受ける。

「傷を増やし」

「傷を埋めツ！」
うず

「罪を重ね」

「罪を清めんツ！」

三人の顔を順に見渡し、表情を緩めずニコラウスは続ける。

「我らこそ聖夜を駆ける者、幼子と乙女の守護者なり」

「我らこそ聖夜を駆ける者、悪徳と殺戮の殲滅者なりツ！」

「我らこそ聖夜を往く者、心打つ贈物の届け手なり」
プレゼント

「我らこそ聖夜を往く者、心撃つ弾丸の撃ち手なりツ！」
ブレット

「そう我らこそ！」

「小隊結社ツ！」
ザ・カンパニー

四人は声を揃え、高らかに叫んだ。

「悪・ニコラウス！」
バアアアッ

呆気あつけに取られた、といった様子で。ドンレヴィらは手を上げたまま、横でそれを見て

いた。

気にした風もなくニコラウスは言う。

「まあ良い、イヴの夜は長い。仕事の遅れも取り返せよう。さて代行者諸君ジェントルメン、こうして私

が直々に、あれらを連行したわけだが。どうしたいかね。許す、自由に発言せよ」
 姿勢をそのままに、表情だけ崩してキッドが言う。

「もうたいがい撃つたスから……縛り首？ それか馬で、死ぬまで引きずる？ あ、いつそ町の奴に任せますか。どんな私刑リンチ考えつくつスカね」

クリスは何も言わず、それを聞いて眉根を寄せた。額にしわが入り、鼻が固くうごめいていた。

なまりのある言葉でスラツシャーがつぶやく。

「ああだすっばったこっばったこうだ言わんと、早よ殺やつたらよええがかろうが……時間の無駄ぜよ」

ニコラウスはクリスを見る。

「どうした、提督アドミランテ、好きに述べよ、ただし鯨に食わすには距離があるぞ」

表情を変えず、クリスは重く口を開く。

「そうですな……さっさと一思いに——」

そのとき銃声が響いた、外から。同時にドンレヴィが肩を押さえ、うめく。

クリスらが外へ銃を向けた、その先にいたのは。壊れ落ちそうなスウィングドアの向こう、震えながら両手で拳銃を構える小さな人影。

「……死ね、詫びて死ね、死んでも、詫びろ……！」

ジョシユア・ウォーデン。かつてサンタに銃をねだった、今年サンタの死を願った少

年
だ
っ
た。
。

第7話

ジョシユアは震える銃口を、無理矢理酒場の中へ向ける。妹の仇、ねじくれた縫い傷の男は目を見開き、肩の傷を押さえてただ後ずさっていた。

銃を構え、三つ編みの女が声を上げる。

「少年。やめておけ、あれらは我々が——」

ジョシユアは歯を剥いて叫ぶ。息が白く舞い上がる。

「うるせえ、おれが悪いんだ、守れなかった、弱くて……！ だからおれが、殺る」

撃鉄を起こす金属音が、鈴ジングルベルの音のように清く響いた。

ジョシユアの震えは止まっていた。仇へと銃口を向け、引き金に添えた指を、ゆつくりと絞った。仇は力なく震え、血走った目をいよいよ見開いていた。

引き金を絞り切る。瞬間、反動が両手を打った。乾いた音が夜に響く。

外しようのない距離だった、それでも。仇は死んでいなかった。

「なんで……」

つぶやくジョシユアのの前には。仇をかばうように両腕を広げた、眼帯のサンタが立ち

塞がっていた。その腹から弾丸が一つこぼれ落ちる。

もう一度撃鉄を起こすより早く、眼帯のサンタが腕を振るう。ジョシユアはそのまま地面に叩きつけられた。丸太で殴られたかのような平手で。

顔だけをどうにか起こしたところへ、眼帯のサンタの声が降る。

「なあおい。おめえは随分覚えがいい、確かに俺あ言った。力のある奴が全部取る、力のねえ奴が全部悪い。力がねえなら泣き寝入れ、とよ。だが」

屈み込み、ジョシユアの目を見ながら言う。

「言つてねえぞ。それが正しい、なんてよ」

ジョシユアは何も言えなかった。ただ、サンタの目を見ていた。

息をついてサンタは立ち上がる。背を向け、つぶやくように言った。

「正直、俺のせいかもしれねえ……この大陸がそうなっちまったのはよ。だが、ここまでいい。力のある奴が正しいなんてのは、俺らと、奴らまでいい」

眼帯のサンタは散弾銃を抜く。仇へと歩み寄り、頭へ向け引き金を引いた。悲鳴を上げるその部下へ向け、もう一発。銃身を折って空葉莢を取り出し、弾丸を込め直す。残りの部下も全て撃った。

衣の裾をひるがえし、音を立てて銃を納めた。

「コンプリート、^{マム}長官殿」

女サンタへ向き直り、姿勢を正してそう言ったが。女は呆れたように息をつく。

「たわけ。貴様は何者だ？ 従来よりの任務が完了しておらんぞ、慌てん坊め」

今気づいた、といったように、眼帯のサンタは口を開けた。硝煙と返り血に汚れた手を慌ててズボンで拭き、放り出していた袋を取る。

そこから取り出したのは。明らかに袋の大きさを越える量の、さまざまなおもちや。身を起こしたジョシユアの前に、照れたように笑ってそれを置く。

「ほれ。全員のリクエストどおりだが、大分色つけといたぜ。ガキどもに配ってやれ、ああ、お前も余ったの好きなやつ取れよ」

大きな手が、砕くような力でジョシユアの頭をなでる。その手に腕を取られて立ち上がった。通りの端、酒場から離れた所へと共に歩く。女サンタは手ぶらで悠々と歩き、残る二人のサンタはそれぞれの袋と、出されたおもちやを抱えてついてきた。

眼帯のサンタが歯を見せて言う。

「さあて。景気づけだ、いっちょやるか！」

銃帯を巻いたサンタが楽しげに口笛を吹き、刀を帯びたサンタは歯を見せた。女サンタもうなずいている。

眼帯のサンタは自らの袋へ両腕を突っ込む。何か重いものでも引つ張り出そうとしているかのように腰を落とし、うなりながら後ずさった。やがて地面を擦る音を立て、

引きずり出されたものは。明らかに、どうやっても、袋に入り切る大きさではなかった。「むううう……ほッ！」

かけ声と共に、眼帯のサンタが肩にかついだのは。大砲。軍隊で使われたり船に取りつけられる、黒々とした大砲だった。大人の身長ほども長さがあり、一人でかつげるような重さではないはずだった。

女のサンタが指示を飛ばす。

榴弾砲、装薬――」

刀のサンタは自らの袋へ手を伸ばした。取り出したのはこれも入るはずのない、長く大きな手桶。そこに入っていた黒い粉粒――黒色火薬だろ――を、砲口から流し入れる。さらに取り出した棒状のものを中へ突っ込み、突き固めた。ぼそりと言う。

「玉薬よろし」

女サンタは酒場を指差す。

「十二時の方向、目標酒場！ 角度は……当たるようにせよ！」

投げやりな指示に苦笑いしつつ、眼帯のサンタが砲を持ち上げる。酒場へと向けた。

「指向よろし」

「装填せよ！」

指示を受け、銃のサンタが取り出したのは。短い筒状の台座のついた、黒々とした砲

弾。その上部に据えられた太短い紙の塊——導火線というやつか——に火をつけた。そのまま台座の方から砲口へと落とし入れる。素早く砲の後ろへ回り、後部から伸びる紐を握った。

「装填完了！」

「ツ撃ええ！」

紐を引くと同時、撃鉄の作動音がして。それをかき消すような轟音と共に、砲身を、眼帯のサンタの足腰を揺らし、空気を震わせて砲弾が飛ぶ。

派手な音を立てて酒場の壁を破ったそれは数秒後、思い出したように炸裂した。炎が壁の隙間から噴き出し、屋根をなめる。煙を上げ、軋む音を立て、ゆつくりと酒場は崩れ落ちた。

砲を放り捨てた眼帯のサンタらが口笛を吹き、叫び声を上げる。

「ハッハア、イイツハー！」

女が無邪気に顔をほころばせ、三人の男が互いの手を叩き交わす横で。ジョシユアは何も言えず、目を瞬かせて立ち尽くしていた。

この騒ぎに、さすがに様子を見ていたか。町の家々の窓が開き、通りに姿を見せる者も出てきた。

ジョシユアはサンタらに声をかけようとしたが、何を言うかも分からず煙にむせた。

その間に四人はそれぞれ、一際長く口笛を吹いた。合図だったのか、町の外から蹄と鈴の音を響かせて四頭の馬が駆けてくる。袋をかついで馬に跳び乗り、サンタクロースたちは駆け出した。

遠ざかりながら、眼帯のサンタが振り向いた。

「あばよ兄弟！ ウイー・ウイッシー・ユア・メリー！ クリスマス」

口を開けたまま、ジョシユアは何とか手を振ることができた。

町の人々は通りに出て、燃える酒場の炎を見ていた。やがて雪が降り、燃え広がる前に火は治まった。

蹄と鈴の音が荒野を駆ける。雲の行く手からそれ、降り出した粉雪は止んでいた。振り向いても、もう町の火は見えなかった。

先頭を行くニコラウスが口を開く。

「提督、ご苦勞だったな。想定よりは大きな仕事だったが、どうだ。大西洋より楽だったろう」

「そういう言い方もできませあな。それより、ちいと手間取った。次は——」

クリスが言いかけたとき。四人のものではない声が後ろから響いた。離れた場所か

らかけられた声に違いなかったが、くぐもつて響くそれはまるで、耳元でささやかれたかのようだった。

「何処ドへ行ミこうとネ—クオ・ヴァ・デイスいうのか？ 裁きにか？ 裁かれにか？ 罪人を減らしにか、罪を増やしにか？ なあ……ニコラウスよ」

四人は手綱を強く引く。馬は悲鳴に似たいなきを上げながら足を緩め、止まった。振り向けば。

月を背に、馬に乗った男がいた。ありえなかった。男がいるのは今、自分たちが走り抜けてきた場所だ。辺りに人影もなかったはずだった。

男は四人に向け、ゆつくりと馬を歩ませる。目深にかぶったテンガロンハットと口元を覆うマフラーのせいで人相は分からない。体は荒野の色をしたポンチョにゆつたりと包まれていた。

ニコラウスが口を開く。

「貴方は」

男は無言のままマフラーを下げた。くわえた細巻シガリロに点火するマッチの火が、口元とあごに整えられた黒い髭を照らし出す。細巻を持った手の甲には突き刺されたような古傷が見えた。吐き出される煙が月明かりに白く舞う。

ニコラウスが息を飲んだ。

「貴方は――」

第8話

クリスは言う。

「誰だ？ ま、誰だつていいがよ。俺らの敵か、それとも他か」

「つつても、味方なわけねーつよ。オレらの仲間以外は……な！」

そう言ったキツドの、銃帯に添えていた左手が別の生き物のように動く。流れるように銃を抜いて男へ向けた、しかし。それは銃声と共に跳ね飛ばされていた。いつ抜いたのか、男の手には細く煙を昇らせる拳銃があった。

舌打ちと共にキツドが右腰の銃に手をやる。同時にスラツシャーが刀を抜き、クリスが散弾銃を向ける。そしてまた、それと同時に。男は右手で引き金を絞ったまま、左手で煽るように撃鉄を弾いていた、三連続で。

まるで一つのように重なり響く銃声を残した連射が、正確にキツドの銃を、スラツシャーの刀を撃ち落とし、クリスの散弾銃へまともに当たる。

「クソ、がつ……！」

だが、クリスはその手を離さなかった。軋む音を立てて奥歯を噛みしめ、痺れる手で

無理矢理相手に向ける。引き金を引いた。

闇を裂いて火を吹いたそれはしかし、外れていた。早く撃ちすぎたか、地面に着弾し土煙を上げた。奇妙なことに、男の両側で。

「な………？」

構え直してさらに撃つ、が。かすった様子すらなかった。決して遠い距離でもなく、正面からまつすぐ放ったというのに。まるで散弾の方が男を畏れ、身をかわしたかのようだった。

クリスは口を開け、キッドは手を押さえ、スラツシャーは唇を噛み締めていた。だがそれぞれに、別の武器へじりじりと手を伸ばし、あるいは男の様子をうかがいつつ、撃ち落とされた武器と自分との距離を測っていた。

ニコラウスが声を上げる。

「貴様ら、やめよ！ この御方は——」

拳銃を弄び、納めた後。細巻の煙を一度吹かし、男はキッドの方を見た。

「^{利き手}左手ですら及ばなかったのだ、右手では致しようもあるまい。なあウイリアム………お前の罪はこの国での、多数の強盗とそれに伴う殺人。ウイリアム、怪童^{ビリーザ・キッド}ビリー^{ヘンリー}。H・

マッカーティ、ジュニア
M・Jr

スラツシャーに顔を向ける。

「それ以上続けるなら、次はその手に穴が開くぞ。私のようにな、イゾー……お前の罪はニホンでの、政治目的による複数の殺人。そのカタナによつてな、以蔵^{イソウ} 人斬り^{スラツシヤ}」
岡田^{オカダ}

そして間を置き、クリスを見据えた。

「かつて私を背負つて川を渡した、大力の男もお前と似た名を得ていた。何故お前はそうならなかつた？ 正しい渡し守に、海を越えて渡す者に。なあ、クリストファー」

煙を空へと吹かし、続ける。

「かつてイタリアで生まれ、ポルトガルで船乗りとなり。スペイン王室の支援を受けての、新大陸航路発見という偉大な功績にも関わらず。……お前の罪は先住民族に対する殺人、組織立てた大量の殺人、いや虐殺、虐殺……虐殺。先住民族の奴隷化、彼らの土地への侵略。南北新大陸における、侵略と民族的差別の嚆矢。なあクリストファー。クリストファー 虐殺提督^{ザ・バイオニア} コロンブス」

男は馬の首を巡らし、ニコラウスへと向き直る。

「そして何故。お前は彼らを率いている、地獄に堕ちた者たちを。亡者から強者を選びすぎり、何故人を殺させる。お前の役目はそうではあるまい、五十九代目 聖き好々爺^{サンタクロース} 聖ニコラウス——ジャンヌ・ダルク」

ニコラウスは齒を噛み締めてうつつむく。

クリスは言った。

「で？俺らをようくご存知の、そちらさんは何だつてんだ」

男は古傷のある両手で帽子とマフラーを取る。豊かに波打つ黒髪がその下からこぼれ落ちた。ややこけた頬は東洋かユダヤ系といったように黄色味を帯びている。そして、その額を飾るのは、荊いばらで編まれた冠だった。

キッドは目を見開いたまま口をわななかせ、スラッシュャーは眉を寄せる。

頬を引きつらせてクリスはつぶやいた。

「ジーザス・クライスト……ジーザス・クライスト……ジーザス・クライスト……何てこつた畜生……イエス・キリストとはよ……！」

イエスは四人をゆっくりと見回し、ニコラウスに目を向ける。

「アィメン真に、お前たちに告げよう。私はかつて言った、裁くな、汝ら裁かれん為なり、と。罪

無き者だけが罪を裁くがよい、そして罪無き者など人の間には無し。裁きはただ神のもの。……何故、お前たちがそれを行なう」

ニコラウスは唇を噛んでいたが、やがて顔を上げ、イエスを見据えた。

「……お言葉ですが、主よ。右の頬を打たれ左の頬を差し出す前に、撃ち殺される者がおります。下着を奪う者に上着はおろか、全ての財を奪われる者がおります。一ミリオン来いと強いる者と二ミリオン共に行く間に、みみさお操を奪われる乙女がおります」

表情を変えずイエスは言う。

「……人の子であった頃のお前が——」

ニコラウスは続ける。

「そうであったように。それでも天は何もしない、先代ニコラウスが先の町でも、他の町でも。銃を、平和のための力を願う子に、おもちゃのそれを与えたように。……どこにいるのだ。魚を望む子に、蛇を与える馬鹿がどこにいるのだ！」

頬を歪めて叫んだ後、何度か息を吸い込んで続けた。

「だから、私は決めたのです。良き人が良き倉から良きものを取り出し、悪しき人が悪しき倉から悪しきものを取り出すのならば。良き者にならずともよい、悪しき者によって、全ての悪しき倉を打ち壊そうと。……決めたのだ、幼子には——」

うつむいたままクリスがつぶやく。

「——平和を」

目を見開きそちらを見た後、ニコラウスが続ける。

「それを脅かす者には——」

キツドが口を開き、スラッシャーが後を受ける。

「——鉛玉と」

「——死を」

ニコラウスは三人を見、長く緩やかに息をついた。イエスへと向き直る。少しだけ自

由になった頬を震わせ、叫ぶ。

「——贈つてやると！ 決めたのだ」

イエスは何も言わず目をつむった。細巻の焦げる音だけが静かに響いた。

やがてしびれを切らしたように、クリスは馬から飛び下りる。唾を吐き飛ばして言った。

「おう、その七光り。どうするんでえ……とつとつと決めな。道を空けるか、パパんとこ帰るか。なんなら……いつでも送つてやるぜ」

拳銃を引き抜き、天を指す。指先を用心金に入れ、弄ぶように回してみせた。

ニコラウスが顔を引きつらせる。

「おま、貴様……！」

見下ろすような目で馬上のイエスを見上げ、クリスは続けた。

「正しかろうが悪しかろうが。力のある奴が全部取る、力のねえ奴が全部悪い。力がねえなら泣き寝入れ、この世はいつもそんなんだ。正しかろうが悪しかろうが……俺たちの時代までは、な」

イエスが細巻を口から離し、クリスの目を見る。

「ならばこれより後は違う、と？」

「俺らは行くと言つてんだ。正しかろうが悪しかろうが、力ずくだろうがな。止めた

きや止めな、それとも——」

クリスは困ったように眉を寄せ、優しく笑う。

「——可哀^{かええ}そうに、怖^{こえ}えか坊ちゃん？」

イエスは表情を消し、それから息をついて笑った。

「聞いたことはないか？ 試みてはならない、と」

「さあてね。俺が知ってんのは、試みに応えられない奴あ、決まって試みに耐えられない奴だつてことさ。耐えられないなら神であつても、そいつはもう男じやねえ」

口を開けたまま、イエスの表情が再び消える。考えるように細巻を口にし、煙を吹かず。音を立てて馬から下りた。ポンチョを肩へ巻くり上げ、腰の銃帯を示す。

「私は常に言葉を選^ぶ、相手に理解できる話をするために。お前にそこまでの覚悟があるならば——私も、拳銃^{通訳}を以て語るにやぶさかではない」

つまんだ細巻を落とし、踏み消す。

「あえてお前の弾丸に避けさせはすまい……だが良いのか？ 私が望むなら右の胸を撃たれる前に、お前の左胸を撃ち抜くことも出来るのだぞ」

嬉しげにクリスは笑う。

「御意のままに、よ。今度は叫ぶ暇があるといいな、主^{エリ・エリ・レマ・サバ}よ主^クよ我を見捨^タて給^ニうか。聖痕^{グマ}が頭に増える前によ」

馬を下りたニコラウスが駆け寄る。

「クリス、クリスやめよ！ 命ずる、今すぐ銃を捨てて詫びろ！」
わずかに後ろを見、クリスは言う。

「二人とも……押さえとけ」

スラツシャーが後ろから抱き止め、キッドが前から肩を押さえる。

キッドが言った。

「旦那、早撃ちならオレが」

クリスは唇の端で笑う。

「子供キッドにや刺激が強すぎら、こいつあ大人の楽しみだ。……譲れや」

クリスはワイヤーを仕込んだ上衣を捨てた。シャツも何も脱ぎ捨て、上は全て裸となる。帽子は頭に載せたまま。右腰に拳銃を吊ったものの他、銃帯も他の武器も捨てた。軽量化のためか、銃に込めていた弾丸も一発を残し、全て捨てた。その一発を撃てるよう、回転弾倉シリンダーを回して合わせる。具合を確かめるように、右手で銃を弄ぶ。

音を立ててホルスターへ納めた。腰を落とし、白い息をゆつくりと吐き。両の肘を曲げた。

「……来なバモ」

イエスもわずかに腰を落とし、右手を開いた。

「いつでも……良い」

視線をそらさぬままクリスは言う。

「キッド、合図だ。真ん中に帽子を投げな。それが地についた瞬間、決着だ」

キッドは唇をなめた。ニコラウスは震える目を見開き、スラツシャーは射抜くような視線を投げかける。

キッドが帽子に手をかける。それが宙に舞った。風はなく、真つすぐに、帽子は二人の間へ。ゆつくりと、落ちた。

銃声が同時、一つとなって交錯する。

最終話

イエスの髪が数本宙を舞う。傷はなく、だがその荊の冠が、後方へと飛ばされて落ちた。

クリスは。傷はなく、ただその帽子が、数本の髪と共に撃ち飛ばされていた。

煙を上げる銃を向け合ったまま、そのまま二人はいた。

風が吹き抜け、煙を散らした。その後イエスが口を開く。

「何故、そこを撃った」

クリスに表情はない。

「さあてね、逸れたか。なぜ、殺さなかった」

「お前がそこを撃つ気だったから。お前に殺す気がなく、お前が死ぬ気だったからだ……彼女らの罪を背負って」

イエスは空を見上げた。それから両手の古傷に目を落とす。深く息をつく。ゆっくりと拳銃を回し、音を立てて納めた。

銃を納めながらクリスは言う。

「いいのかい、本当ならあんたの勝ちだろうに。もう一発撃つてりやあ」
イエスは鼻で笑う。

「馬鹿にするな。六連発を持ち運ぶなら、一発は空にしておくのが常識。落としての暴発を防ぐためにな。……もう、弾倉に弾は無い」

イエスの目の奥を見据えながら。クリスは深く、溜めるような息をつく。

「なら……どうなさるんで、主よ」

イエスは目深にテンガロンハットをかぶり、マフラーを巻き直す。細巻に火を点けた。

「何を言っている？ よりによつて聖夜イヴに、神の子がこんな所にいるわけがなからう。

私はただの無法者アウトローだ」

クリスは口を開け、それから肩を揺すった。笑う。

「そうかい、俺らと同じだな」

馬に乗ると、テンガロンハットの無法者は言った。

「二つ聞かせよ。何故お前は、彼女らのために己を捨てようとした。引き上げてくれた恩か、仲間だからか」

服を着込みながらクリスが答える。

「そのとおりで……ついでに言や、もう一つ。十代ほど前のニコラウスにや、でけえ借り

がありましたね。聖ニコラウスは幼子と乙女、船乗りの守護者なもので、息をこぼして無法者は笑い、うなずく。

クリスは自分とキツドの帽子を拾い、ニコラウスらの方へ歩んだ。

「長官殿。行こうぜ、同志たち。面倒なことにならねえうちに」

「お前は……貴様という奴は……」

ニコラウスは唇を歪め頬を引きつらせ、涙の溜まる目を震わせていた。

キツドとスラツシャーは笑い、クリスとうなずき合う。三人でニコラウスを馬上へと押し上げた。武器を拾うと、自分たちもそれぞれ騎乗した。

テンガロンハットの無法者が言う。

「最後にこれだけは言っておく。裁く者はいつか裁かれる……神ならぬ身ならば、必ず」
穴の開いた帽子を手にしたまま、眼帯の無法者は笑う。

「俺もこれだけは言っとくぜ。……誕生日おめでとう、ミスター」

テンガロンハットの男は笑い、眼帯の男は帽子をかぶる。そして仲間と共に、馬を駆け出させた。

蹄と鈴の音が、再び荒野を駆け抜ける。

先頭をゆくニコラウスは、何度か口を閉じては開いていたが、やがて大きく口を開いた。

「馬鹿か貴様はッ！」

「当ったりめえよ」

前を向いたままクリスは応じ、それから。何かに気づいたように辺りを見回す。

蹄の音。どこからか荒野に遠く響く、いくつもいくつもの蹄の音、そして鈴の音。

やがて。荒野のあちこちに見えた、赤い影が。響き出した、荒野を揺らす蹄の音が。

夜を駆け抜ける鈴の音^{ジングルベル}が。四人の周りには集っていた。荒野を埋め尽くすような、サン

タクロースの軍団が。

クリスが言う。

「遅^ムえぞでめえら！ 全員揃ってりや、さつきも怖^ムかなかつたのによ！」

キツドが言う。

「長^マ官^ム殿、さつきとご命令を！」

スラツシャーがうなずいてみせる。

ニコラウスは苦笑して、大きく息を吸い込んだ。軍団の方へと振り向き、叫ぶ。

「貴様ら遅いぞ、たるんでおる！ 取り急ぎ任務続行、ジル・ド・レは左翼、リヨ・フは

右翼、ノブナガは中央を率いよ！ 私はクリスらと共に向かう！ さあ……往けッ！」

夜に声を轟かせ、全員が唱和する。

「^{ママム}押忍、^{イエス・ママム}長官殿！」

キッドが口笛を吹き、スラツシャーが笑みを見せ、ニコラウスは笑って涙をこぼした。

クリスが声の限りに叫ぶ。

「^{メリー・クリスマス}クリスマスだ！ ^{メリー・クリスマス}クリスマスだぜ、^{カンパニエーロ}同志たちよ！」

（^{ウイー・ウイツシュ・ユア・メリー・クリスマス}終 劇）